

聖書：ダニエル書 2：1～24

説教題：知恵と力は神のもの

日時：2014年11月16日

ダニエル書2章は長いため、2回に分けて見ます。バビロンの王ネブカデネザルはある時、いくつかの夢を見て心が騒ぎ、眠れなくなりました。そこで夢の意味を説き明かしてもらおうと、バビロンの呪法師たちを呼び寄せたことから話が始まります。2節に呪法師、呪文師、呪術師と出て来ますが、これはそのような肩書きで呼ばれる人たちがいたということなのでしょう。4つ目の「カルデヤ人」には印がついていて、欄外を見ると「占星師」「学者」と記されています。ですからこの「カルデヤ人」とは魔術の専門家たちを指す特別な言葉だったのでしょうか。その彼らに王が求めたことは、夢の意味を解き明かすだけでなく、夢の内容も言い当てることでした。なぜネブカデネザルは自分が見た夢について告げなかったのでしょうか。ある学者は、王が自分の見た夢を思い出せなかったからだろうと言っていますが、そうではなかったと思われる。もし夢を忘れたら、呪法師たちが「あなたが見た夢はこうです」と語っても、それが本当に合っているかどうか確かめることができなくなります。ですからこれは呪法師たちの解き明かしが信じるに値するかどうか、確かめるためだったのでしょうか。王は、それができなければあなたがたの手足を切り離せさせ、あなたがたの家を滅ぼしてゴミの山とさせると言います。

呪法師たちは慌てて答えます。7節：「彼らは再び答えて言った。『王よ。しもべたちにその夢をお話してください。そうすれば、解き明かしてごらんに入れます。』」しかし王は聞きません。「あなたがたはそうやって時をかせごうとしている」と言います。「時が移り変わるまで、偽りと欺きの言葉を述べようと企んでいる」と。だからまず私の夢がどんな夢かを話してみよ。そうすればあなたがたがその解き明かしを私に示せるかどうか、私に分かるだろう、と言います。

それに対してカルデヤ人たちは言います。10～11節：「カルデヤびとたちは王の前に答えて言った。『この地上には、王の言われることを示すことのできる者はひとりもありません。どんな偉大な権力のある王でも、このようなことを呪法師や呪文師、あるいはカルデヤびとに尋ねたことはかつてありません。王のお尋ねになることは、むずかしいことです。肉なる者とその住まいを共にされない神々以外には、それを王の前

に示すことのできる者はいません。』」 王の立場に立てば、本当に夢の意味を説き明かせるなら、まず夢そのものを告げてみよと要求したくなるのも理解できます。しかし呪法師たちの立場に立てば、これはあまりにも無茶な要求です。何かを話してくれれば、それについてコメントすることはできるでしょうが、王の心にあることをまず話すなどということはできるはずがない。不可能である！読む私たちもカルデヤびとたちに同情したくなります。人間の知恵では到底無理だ！と。しかしまことの神にはそうでない。主なる神にはそれができる。主なる神だけにそれができる。そのことがこの後、示されて行くのです。その舞台がこのカルデヤびとたちの叫びによってセットされたわけです。

さてこの結果、大変な命令が王から下されます。それはバビロンの知者をすべて滅ぼせ！というものです。ダニエルたちも「知者」のグループに入っていますから、彼らもまた殺されなければならないということになります。ダニエルの立場に自分を置いて見るならどうでしょうか。せつかくここまで守られて、さあこれからという時にいきなり「知者たちをみな殺せ！」という命令が出たのです。普通ならパニック状態に陥るところでしょう。

しかし 14 節を見ると、ダニエルは「知恵と思慮とをもって対応した」とあります。彼は慌てていません。彼は落ち着いていました。これは生まれながら持っていた性格によるものと言うよりは、やはり主への信仰から来るものだったでしょう。ダニエルはこの状況も主権者なる神の御手の下にあることであって、何らかのご計画がここにもあると仰いでいたのでしょう。彼はなぜこのような命令が出たかを、侍従長アルヨクに尋ねます。そして解き明かしのためにしばらくの時を与えてくれるように願い出て、まず天の神にあわれみを請うて祈ります。この書にはダニエルの祈る姿がしばしば出て来ます。またダニエルは自分一人が祈るだけでなく、3人の同僚、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤと共に祈りました。

そうした日の夜、ダニエルに天の神から啓示が与えられることとなります。彼はそこで王が見た夢の中身も、またその意味についても、主から教え示されます。その内容については次回 25 節以降で見ます。その前にここで注目したいことは、ダニエルは主からの啓示を受けて、すぐ王のところに走って行ったのではなかったということです。物語としては、19 節で神からの啓示があった後、24 節に飛んでも良いでしょう。しかしその間に 20～23 節のことが含まれています。すなわち賛美に彼は時間を取って

います。しばしば私たちは神に導きを求めて一生懸命祈りますが、それが与えられると感謝のための時間を取らずに、すぐ次の行動に走って行きやすいものです。感謝をするために主のもとに帰ること、そして賛美の時間を取ることを軽んじてしまいやすい。しかしダニエルはここでそれをしています。その模範を私たちはここに見ます。そしてここにこれが記されているのは、単に模範を示すためだけでなく、次に進む前に心に留めるべき重要なメッセージがここにあるからでしょう。このダニエルの感謝と賛美の言葉を通して、そこに示されている神のお姿をしっかりと心に刻むことが、私たちにとっても重要であるということです。

まずダニエルは 20 節で「神の御名はとこしえからとこしえまでほむべきかな。知恵と力は神のもの。」と言います。ダニエルたちは今、バビロンにいました。世界の覇者となったバビロンの人たちは自分たちの繁栄を祝い、栄華を誇っています。多くの知者たちもそこにいます。しかし彼らは王の夢を言い当てることができなかつた。その一方、神にそれはできる。なぜなら知恵と力は神のものだからです。また 21 節に「神は季節と時を変え」とあります。すなわち自然界を支配しておられるのも神である。また「王を廃し、王を立て」とあります。すなわちこの世界の歴史、人類の歴史を支配しているのも神である。今、ネブカデネザルが世界の王として立っていますが、それは神が彼を立てておられるからである。その彼もやがてその王座から引き降ろされるでしょう。それもまた神の御手による。そしてこの神こそ、人々に知恵と知識を授けるお方。深くて測り知れないことも、隠されていることも現わされる方。その方が 23 節にあるように、ダニエルに知恵と力を賜ったのです。そしてダニエルたちが希ったこと、すなわち王の夢とそのメッセージについて知らせてくださった。このように神を賛美して後、ダニエルは 24 節で王のところへと向かったのです。この賛美の言葉を心に留めてじっくり思い巡らすことは、捕囚の民にとってどんなに大きな慰めだったのでしょうか。この地においても、知恵と力は神のものである。ネブカデネザルとその国がどんなに力強く見えても、その彼を立て、またやがての日に廃されるも神であられる。神こそが主権を持ち、この世界全体に対する計画を持って、歴史を支配し、導いておられる。そしてそのご自身の御心を、いわば秘密を、必要に応じて私たちに示すことがおできになる。こういう神を自分たちは持っているのだ！とイスラエルの民は喜ぶことができるのです。それゆえに捕囚の地、外国の地においても、まことの知恵と力を持つ方に信頼し、またこの方の光の中を歩むようにと励まされることがで

きるのです。

これは今日の私たちにも当てはまることでしょう。前回は述べましたように、天国の市民である私たちは今、自分たちの国ではない所に住んでいます。まことの神を信じるのではない人々が大多数を占める国、異教の社会の中で生活しています。その私たちが置かれている社会も色々と繁栄しています。人々は知識を誇り、富を誇り、システムを誇り、技術を誇っています。このバビロンの国のようです。しかしそこにいる一体誰が、これから先のことについての光を持っているのでしょうか。世界はどこへ向かって進んでいるのか、世の人々は知りません。世界の国々の動きを見て、どういう力関係でこれから歴史が進むのか色々予想したりはします。あるいは自然界の変化、温暖化や環境汚染でどうなることかとも恐れています。そういった諸問題に対して、人間の技術や科学の力で新しい将来を切り開いていけると希望する人もいます。一方で世界は偶然や運命のような人間を越えた力によって決まって行くと考える人もいます。しかし誰も確固たることは言えません。人間の知恵によっては何も言うことができないのです。10～11節のカルデヤ人たちの叫びと同じです。

しかしそのような中で私たちは「知恵と力は神のもの！」と告白することができるのです。この世界を造り、知恵をもって治めている神が、一切の主権を持ち、この世界に対するご自身の御心を実現して行かれる。そのようなお方として、神は私たちにご自身の御心、これからしようとしていることを知らせることができる。私たちはそれをどのようにして知ることができるのでしょうか。一言で言えばそれは聖書の内に！ということになります。このダニエル書の時代は聖書がまだ完結していない時代でしたから、特に聖書に書き留められるため、直接的な啓示がありました。しかし今や神の啓示は十分に示され、書き留められ、加えられる必要がなくなったので、直接的啓示は不要となりました。ですから私たちは聖書に集中すれば良いのです。知る必要のあることは全部ここに示されているのです。そこで主は何と言っているのでしょうか。詳しくは次回見ますが、主はこれからのことについて様々な国が起こっては過ぎ去るが、ついに永遠に滅ぼされることがない一つの国を立てられると言われます。世界の歴史はそこに向かって行く、と(44節)。そして私たちはこの書と共に、聖書の他の多くの書を通して、これと一致し、さらにこれを補足する多くの言葉に出会います。神は確かにそのことを私たちに示し、またそのように世界を導いておられるお方です。ですから私たちはこの知恵と力を持ちたもう神の御言葉に第一の耳を傾ける者であり

たい。ダニエルのように祈って、それを悟ることができるように願い求めつつ。もちろんそうすれば私たちはこれからのことすべてが分かるわけではありません。私たちはあくまでも神が良しとして示されたことのみを知るのです。しかし私たちにとっての慰めは、神が私たちに告げないことも神は知っておられるということです。22 節後半に、神は「暗黒にあるものを知り」とあります。私たちには知り得ない、「暗黒にあるもの」と表現されるようなことも神はすべて知っておられる。ですから私たちは全部を知らなくても、神がこれらのことも全部知り、御手に治めておられると知るだけで、私たちにとっては十分ではないでしょうか。私たちはこのような神と共に歩むことができるのです。

私たちもこの世で、この世の知恵と力に囲まれて生活しています。その中で何に頼り、何に信頼を置く者でしょうか。ダニエルのように「知恵と力は神のもの」と告白して私たちも歩みたいと思います。たとえバビロンの国にいても、このように告白して歩むことができる。どんなに異教思想が支配する中でも、真の支配者は主なる神である。私たちはダニエルと共に 20～23 節の賛美を主にささげて、この神と共に歩める幸いを感謝したいと思います。それゆえにこの方の御言葉に第一の耳を傾け、祈りを通してさらに知恵を与えられ、暗黒にあることもこの方にお委ねして、この方の光に照らされて歩む信仰の民の幸いに生かされていきたいと思います。